

臨床と他者の支えがあったから

橋 本 和 幸

1. 心理臨床家として

私が心理学を専攻する大学院の修士課程に進学したのは、研究をやることよりも、臨床心理士の資格が取れることの方が大きかった。心理学の知見に基づくスキルを用いて対人支援をする仕事をしてみたい。そのためには、将来的に臨床心理士の資格を取れるようにしておいた方が良さだろう。こういう理屈だった。何か心理学に関わる仕事をしたいと探した結果、修了した次の年度に地方自治体のスクールカウンセラーに採用された。そして、3年目からは地方自治体の教育相談所の嘱託相談員とスクールカウンセラーを兼務し、教育領域の心理臨床家として活動した。

指導教員からは修了時に、「紀要でもいいから、毎年1本は発表すると良い」とご助言いただいた。それを何とか守って、毎年度勤務先の紀要への投稿と学会の大会での発表を1本ずつは行った。主な内容は、その年の臨床活動を振り返る事例研究的なものだった。「あんなもの研究とは言えない」云々という陰口が「あちら側」から聞こえてきたが、当時は自分がその時に出来ることを精一杯やるしかなかった。

そして、修了後7年後に大学教員に応募することを勧められた際には、合計20本の「あんなもの」を一覧にして提出することができて、助教として採用してもらえることになったのだった。

2. スクールカウンセラーとして見つけた問題意識

スクールカウンセラーとして勤務している時に、臨床心理士という資格の職能団体である、県の臨床心理士会の役員に選ばれてしまった。主な役割は、スクールカウンセラーを務める、あるいはこれから務めたい会員の支援だった。そこで問題になった

ことの一つに、スクールカウンセラー本人は自分が専門家として十分な働きをしていると自負しているのに対して、勤務する学校の教員たちからの評価は低く、それを受けて雇用主の教育委員会が次年度の契約を結ばないというケースである（注：公立校のスクールカウンセラーの多くが単年度契約の非常勤である）。この評価のズレを可視化して共有しないと、こうした問題が続くと考えた。そこで、スクールカウンセラーが児童生徒やその保護者からの相談時に、その訴えや希望（ニーズ）をよく聞きとってから支援を始めるように、教員や学校もクライアントに見立てて、そのニーズを明確にすることが必要ではないかと考えた。

このようにユーザー視点でニーズを明確にする研究を、賛同してくれた修士課程からの友人3人とともに始めた。このテーマでの研究は長く続けた。その後大学で勤務するようになってから、修士課程と同じ先生に指導教員を引き受けていただき、働きながら博士課程に進学してこのテーマでの研究を行った。

ただし、この研究テーマは同業者受けが必ずしも良くないようである。例えば、とある学会の大会で研究内容を口頭発表した際には、聴衆の一人であるとある大学の教授（医師）から、「学校は敵だろ！子どもたちのために学校と闘わないでどうする！」と痛烈に批判されたことがあった。見に来てくれた学部の同期は、今でも会うたびに「あんなに感情的な相手に、よくまあ穏やかに応答していたもんだ」と半ばあきれながら、振り返ってくれる。おそらく、私が鈍感だったおかげで、酷いことを言われていることに気づけなかったのだらうと思われる。

3. 共同研究の誘い

心理学の統計解析によく用いられるパソコンソフトにSPSSというものがある。修士課程在学時に、指導教員が操作する様子から見様見真似で使い方を覚えていった。ある時、後輩が卒業論文で統計処理をしなければいけない、どうしたらいいのか、と質問してきたので、Excelに結果を入力して、それをSPSSで開いて計算する、ということを試行してみせた。その様子に尾ひれはひれがついてしまい、「彼は統計ができるらしい」という誤解が生じてしまった。何度も否定したがうまくいかず、在学中から修了後にも後輩からデータを分析してほしい依頼があり、その都度SPSSを動かしたのだった。それらのいくつかが論文や学会発表となった際に、「統計処理への貢献」ということで連名にしてもらえたことがあった。

こうした誤解は、最初に務めた大学でも、SPSSに触っているのを見た他学科の教員から、自分が取ったデータをどうしたらいいかという相談から始まり、研究を計画

する段階から一緒に考えてもらえないかと依頼されるという形で生じたのだった。

一方、それとは別に、他大学で心理学の専任教員をしている人から、一緒に研究することを誘われたことがあった。彼女たちは、きちんと統計を理解して、自分で計画から分析までできるので、上述のような誤解で誘われたわけではなかったはずである。

今となっては、何を期待してくれたのかは定かではないが、「大学生の学生相談」や「高齢者のインターネット利用」などのテーマの研究に参加させてもらえたことは、貴重な経験と研究業績となった。

4. 今日、そして明日の研究予報

これまでの研究業績を振り返ると、自分が行った心理臨床活動を整理して他者に伝えることと、一緒に研究活動を行う機会をくれる他者がいたという2つの要因があったことがわかる。それは今後も変わらずに維持したいと考えている。

共同研究の機会は、高齢者に関する研究の継続のほか、本稿執筆時は公表できないがいくつか誘われているものがある。

博士論文のテーマにもなった、ユーザーによるスクールカウンセラー活動の評価は、今後ユーザーの対象を広げながら継続したい。例えば、小学校や高校の教員、小学生、中学生、高校生及びその保護者のように、博士論文で扱いきれなかった対象に調査したい。

また、本学の子育て支援センターの相談員を併任する機会をもらえたので、そこで心理相談が行われた際には、事例研究としてまとめることを考えている。